

目指す力を育むために カリキュラムづくりは不可欠

教育創造研究センター所長／北海道教育大特任教授 高階玲治

新課程では言語活動や理数教育の充実など多くの重視すべき項目が示され、教科書も質・量共に大きく変更される。教育創造研究センターの高階玲治所長は、そうした中で、各校が教育の重点を定め、カリキュラムを作成する必要性を強調する。

カリキュラムの必要性

日々の実践で目指す力を育むために 学校としての指針が必要

カリキュラムは、「どうすれば子どもに力を付けられるか」を考える指導の設計図のようなものです。教育課程の全体だと、ここまでは広く捉えてください。子どもに付けたい力を学校全体として育んでいくために不可欠なものであり、新学習指導要領の『総則』でも各校で編成することが求められています(図)。

ただ、『VIEW21』のアンケート結果(P.4参照)を見ると、現在、カリキュラムづくりが「ほとんど・あまり」来ていない

と感じている先生が半数近くいます。これは、カリキュラムがなくても、教科書通りに指導すれば授業が成立していたからでしょう。

しかし、次年度からは、そのような方法は通用しなくなります。新課程では、言語活動や理数教育、道徳教育、外国語活動などの充実が求められています。また、情報教育、食育なども改善すべき事項として挙げられます。多くの事項がある中で、初年度からすべてを充実させるのは難しく、自校の実態や願いと照らし合わせて、どの項目から重点的に取り組むかを整理する必要があります。その整理に当たるのが「カリキュラムづくり」なのです。

新課程では教科書が厚くなります。教科用

たかしな・れいじ◎小・中学校教師を勤めた後、盛岡大教授、国立教育研究所企画調整部連絡協力室長、ベネッセ教育研究所所長などを経て現職。専門は教育経営学、学習指導、特別活動。主な編著書に『新学校経営相談12カ月』(全6冊)、『子どもと向き合う時間の確保と教師の職務の効率化』(共に教育開発研究所)など。



図 新学習指導要領 第1章 総則

第1 教育課程編成の一般方針・1(抜粋)

各学校においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの章以下に示すところに従い、児童の人間として調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童の心身の発達の段階や特性を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとし、これらに掲げる目標を達成するよう教育を行うものとする。

図書検定調査審議会の報告書(※)にもあるように、今後は、教科書の内容を吟味して指導することがますます重要になります。しかし、その判断をすべて担任に委ねれば、学級ごとに学習内容や進度にばらつきが出て、学

* 『教科書の改善について～教科書の質・量両面での充実と教科書検定手続きの透明化～(報告)』(2008年12月25日)より、「多くの教員や保護者の間に定着している『教科書に記述されている内容は、すべて教えるものである』という教科書観」の転換が求められる旨が書かれている

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

年間の系統も失われてしまうでしょう。どのような力を、どのような方法で子どもに付けたいかという学校としての考えなしには、授業や日々の教育活動は出来ません。実践の積み重ねを目指す力の育成につながるために、カリキュラムは重要な指針となるのです。

カリキュラム作成のポイント

教科書の変更点の共有を きっかけに、全員でかかわる

『VIEW21』のアンケート結果では、カリキュラムをつくる際の課題として、「カリキュラムづくりに対する意識が低い」「全員で取り組む体制になりにくい」といった声が挙がっています（P.4参照）。多くの校長先生も同じような悩みを抱いていると思います。

カリキュラムは、管理職や教務主任だけでなく、先生方全員が協議に参加してつくるのが理想的です。まず、その過程で教師全員が共通認識を持てます。個々人のカリキュラム作成力、ひいては学校力も高まりますし、子どもの実態が反映されやすくなります。

新課程の全面実施を控えた2010年度は「みんなでカリキュラムをつくろう」と呼び掛ける絶好の機会です。新しい教科書が届くと先生方は皆、「何が変わったのか見てみよう」と思いますから、そうした関心をきっかけ

けに新しい教科書を分析し、その結果を共有することから始めればよいのです。

例えば、次のような作業を年度内に行うと、カリキュラムづくりにとても有効です。

① 変わった点を確認する

担当学年の教科書を学年団で見ても、新たに加わった点など現行の教科書から変わった内容を、他学年の先生もいる全体場で発表します。発表の機会があればしっかり調べますし、全学年の内容を共有できます。詳細に説明する必要はなく、重要な変更点が大まかにイメージできる程度でよいでしょう。

② 変わらなかった点を確認する

同様に、変わらなかった点を共有します。必ず身に付けるべき基礎的・基本的な内容や、重点的に指導すべき点が見えてきます。

このように学校全体で変わった点・変わらなかった点を共有する中で、学年間の系統性と共に、新課程で重視すべきことや必ず定着させるべきことなどを意識できます。更に一歩進めて、「今年度は全学年で○○に力を入れよう」などの重点化を検討することでカリキュラムが形づくられていきます。

カリキュラムは、毎年ゼロからつくる必要はありません。以後は改善を重ねていけばよいのです。カリキュラムは作成後、それらを実践に反映させることこそが重要です。今後は、そのための研修も必要となるでしょう。

作成における校長の役割

① カリキュラムのバランスを整える

校長先生が自身のビジョンを持つことは大切ですが、それを押し通すのではなく、他の先生方から出てきた意見と統合し、全員のカリキュラムとすることが大切です。加えて、「もつと言語活動を入れたらどうだろう」など、新課程の重点項目を意識すると、バランスの取れたカリキュラムになるでしょう。

② カリキュラムづくりの「方針」を立てる

新課程の重点項目をすべて網羅するカリキュラムを一度につくり上げるのは困難です。「今年度は○○、来年度は△△に重点を置いて作成する」などと、複数年かけて「学校力」を高めていく方針を立て、先生方をリードしてください。

カリキュラムの必要性

- 日々の実践の積み重ねを通じて、子どもに目指す力を育むためには、不可欠な指針
- 新課程の全面実施により、各校が教育内容を重点化する必要性がより高まる

カリキュラム作成のポイント

- カリキュラムは、教師全員がかかわってつくるのが理想
- 意識が高まる新課程への移行時期を生かし、新しい教科書の変更点を確認することなどから始めるとよい